

キブツの価値観の検討

ハリー・シエンケル
訳 百瀬直彦

はじめに

キブツが『現在の関心事』であるのはなぜか？ 自己反省ということが数ある答のひとつである。集団的な自己反省、自己分析は、重要な資質である。そのおかげで、キブツ社会は柔軟で適応力に富み、新しいメンバーを受け入れるのと同様に、新しい考え方も取り入れることができる。もしも、この弾力性を保とうとするならば、自己反省は続けられねばならない。——しかし、どんなにして？

私たちが教育と経済、安全と生活程度、政治と移民の吸収などの問題について意見をひるがえし、探求の方法を変える用意のあることは言うを待たない。

しかし、それだけでは、実は十分ではない。私たちの自己分析は、まず、本当に根源的でなくてはならない。基本理念、身についた習慣、時間の試練を経た制度——すべて同じ批判の矢表に立たされねばならない。——しかし、決してぶちこわせばいいという気持ではなしに。

目的は私たち自身、私たちの価値観、制度を知り、理解することであり、その努力がつまり建設的なのである。加えて、もしも、私たちがダイナミックで、実り豊かな社会を建

設しようと望むならば、変革のための変革を叫ぶことなく、しかも必要な変革の前におじけづいてはならない。

以下、キブツの基本的価値の理想的な形を見ていきたい。——表面的な見方かもしれないが、どこか深いところに向かう道を示唆してくれることを願いつつ。

前段階として私たちはそれ自体目的である価値と、目的遂行のための手段にすぎない価値とを区別しなくてはならない。後者の価値の唯一の正当性は手段としてであり、それ自体が終局的な価値ではない。現今、キブツも含めた多くの社会で、これら二種類の価値の

間の区分がばやけ、手段を目的と誤っている傾向がみられる。キブツ社会は、ある種の価値体系の中の計画的変革を理性に基づいて承認していく、という意味で弾力的な社会である。また、キブツの構造、経営、決定のなされ方、メンバー間の関係のあり方はすべてキブツの価値観のあらわれである。このゆえに、これらの諸価値を正確に定義づけ、区別することは重要である。

人間と社会

それでは、キブツ社会の価値観とは何か？ もっとも基本的な価値は人間の自由であると言いたい。その実現のために、私たちは五つの副次的な価値を採用してきた。労働、相互信頼、直接民主主義と直接参加、団結、平等——これらすべてが人間の自由という目的に向かって働く。

普通「自由」というとき、意味するのは、混じりあった二つのことである。

1・ひとの行動に対する外部的な規制のな

が多い。そこで、社会と人間関係——これらは人間の自由にとって欠くことのできない基礎だということができる。

次に「自由」とは、ひとと社会との調和のとれた関係である、というひともいるかもしれない。個人が社会の中に場所を得て、彼の才能を十分に伸ばすことができる限り、彼は自由であるとする。しかしながら、個人と社会とは本来必ず対立する関係にあるとは限らない。社会とは単に必要悪にしかすぎず、そこからできる限りのものを奪い取り、しかも、なるだけそれに邪魔されないでおきたい、という類の説には気を付けねばならない。

「人間と社会」、あるいは「個人と社会」といった言葉づかいは、暗に二つのまったく別なものの対照を指しているように受けとられる。しかし、それは言葉のあやにしかすぎない。実際は個人と社会は互いに独立し分れたものではない。現実には、それら二つは他なしてはやってゆけない、もちつまたれつとの関係にある。ひとびとが関係を結ぶとき、個々の寄せ集め以上の何か新しいものができあが

いこと。

2・願望を達成するための、ひとの力と能力——すなわち、望む通りのことを実現させるために必要な用意のあること。

用意ということは、肉体的に、物質的に、教育的、知的、精神的、社会的、準備でもありうる。

なかには、人間関係のくびきから自由になることによって万事足りると言うひともいる。極端にいって、この見方によると、人間の社会は私たちを束縛し、とじこめ、好きなようにするのをさまたげていることになる。人間関係とは、他人に譲歩し、その意志に従って行動する余地しか残さないものということになる。この見方からいうと、自由とは「社会からの解放」を意味する。ここで私たちは、そのような「解放」がそのためにのみ目指されるということに疑いを懐く。あきらかに、ここにおける目的は、ひとが好きなようにふるまえるという状況を創りあげることである。このためには、もちろん、それを創る手段（資質、能力）が必要となり、そのゆえに自由の定義づけには必ず上に述べた、1、2、の両側面が含まれていなければならない。自由を「社会からの解放」とする見方によると、第

二の側面が完全に無視されてしまえばかりか、その見方は逆に第二の側面に対立することになる。

この第二の側面の強調するところは、自由に到達するために個人は自分の資質を開発し、可能な限り発揮しなくてはならない、ということである。従って、自由な人間とは「自己実現」するひとである。ひとの能力が多様多様であるのは勿論である。——だれしも個々の精神的、美的、肉体的、社会的能力を持っており、それらの才能によって自分を異なった生活の分野で生かすことができる。（だれしも暴力、憎悪の傾向も持っている。しかし、後に述べるように、それは自由への道とはならない。）はつきり把んでおきたいことは、対他人、対社会との関係なくしては、あるいは少なくとも社会による訓練、影響なくしては、自己実現は不可能だということである。個人は社会の一部としてのみ人間としての特性、個人的能力をのばすことができる。ほかに自分を表わすべがない。そのことから、社会の枠外に出た方が内にいるよりも自由である。と簡単に想像するわけにはゆかない。むしろ逆に、社会から隔離することによって能力の開発はおくれ、阻止されること

る。それがいわゆる「社会」である。他方、人間の生活は、社会的関係を除いては営めない。つまり、言葉を替えて言ったら、社会は人間の関係を結ぶという必要（あるいは習性）の上に存在し、片や個人は、「人間性」を求めるという必要（あるいは習性）の上に存在する。そして、「人間性」を求める唯一の方法は社会への参加なのである。この場合、「鶏が先か、卵が先か」ではない。キブツの場合、社会の発展と個人の発展とは同じ銀貨の裏表で、同時に行なわれなければならない。そのゆえに、「個人と社会」（あるいは社会の中の個人）を語る代わりに、「関係の中の人間」を語るべきであろう。自由の本当の意味を理解する上で、この言葉の問題をはつきりさせておくことは重要である。この壁を乗り越えようと、個人と社会との本来的区分と混同して、個人と社会とは独立したものとは、個人と社会とは独立したものである。要するに、個人と社会とは独立したものである。一方は他方のおかげで成り立っているものである。こうして、個人と社会とは相補う関係にある。ここからのひとつの結論は、ひとびとは資質を受容し、のばす、ということである。なんとすれば、まず社会とは、個々人が他の仲間とともに願望を実現

させようとする場であろう。言い換えれば、社会は少なくとも、多少の目的、性格を同じくするひとびとの集まりである。社会は個人のだれよりも大きいが、社会はそれらの個人の集まりによって構成されており、社会自体の性格はそれらのひとびとによって作られていく。ゆえに、ひとが社会を通じて人間性を求めるということは、つまり、人間を通じてというものである。言い換えれば、ひとびと自身が、社会を通じて、人間性の源なのである。

個人と社会は同じものの二つの側面であるとするこの見方が、たとえばホブズ流の、「社会契約学派」とまったく似ても似つかぬものであることはわかるであろう。社会契約学説は、ひととは絶対の独立状態にあると仮定する。しかし、その結果生じる、「万人の、万人に対する闘争」が不愉快なので、市民社会を形成するものとする。つまり、市民社会は、その内部で行動のルールを定めることのできる、共通の枠組である。他方、社会を構成する個人に関係なく、社会はそれ自身の法則に従って存在し、動くと思定する、いわゆる実証学派とも私たちの見方は違っている。かれらの見解によると、個人と社会とはまっ

この見方の持つ意義は二重である。

自由な人間とは、自分を十全に実現できるひ

2・この見方によると、社会の法（広い意味

マ스로ウは、各人がピラミッドの各段階での

自身の解放を願うひとの主な

自己実現のこ

文明について語るとき、私たちはそれによ

私たちが慣習になっているや

のと同時に、文化は、美の感覚と、その具体的なあらわれである習慣、普段の人間関係によって成り立っている。ごく一般的に言い換えたなら、文明は効率、およびその基礎である合理性の表現であり、文化は感覚、美意識、知恵、価値観、立ち居ふるまいの規則、などのあらわれ方のことであると言ってよからう。日常生活では、もちろん文明と文化はダブるが、この二つのものの本当の違いをあいまいにするものではない。

この区別がなぜ重要であるか？ すべての社会において、この二つの現象は別個に存在しうる。すなわち、文明、つまり効率と合理性のための手段は、ある目的のために形成される。（文明の価値の源はその目的にある。）文化、つまり感情、美意識の観念は明らかに文明とは別の領域に存在する。ということは、前にのべた、目的としての価値と、手段としての価値という私たちの区別と並行して、文化（自身で目的価値）と文明（文化のある分野を達成、あるいは支援する手段）の間にも区別がつけられねばならない。私たちの不満は、工業化した現代社会では、文明と文化が

単に日常生活の中でダブるばかりでなく、ひとびとの心の中でより多くダブってしまっていることである。この意味するところは、現代文化の中心価値は文明を高めることにあるといえる。すなわち、現代の『大衆社会』の主な野望は最大限度の効率をあげることであり、それを楽しむことである。かつてのある時代、文明は基本的な必要事を満たすためにのみ存在した。その結果、人間はもっと有益と思うことの達成のために、物理的な制約から解放されることができるようになった。たとえそうであっても、今日広まっている考えによると、最高の価値とは第一次的な必要事をまっとうするようなもの——肉体的満足、地位、物的取得、その他——である。（注・歴史的な先例を述べただけであって、過去を現在に比べてはめたたえているわけではない。）私たちの考えによると、文明の役割というのは、自由への道の第一段階としての生計の必要に役立つところにある。しかし、今日では、それ自体として取り組むべき目的とみなされている。結局、そのような状況は人間が自由をまっとうするさまたげになる。

まず第一の理由は、各人の最も高度な必要事——自己実現、能力を開発し、才能を現実

にうつすこと——が、かくして低次の必要に転化され、低位の価値におとしめられてしまふ。文明のみをよしとするひとは、彼の多様な才能を精神的、知的満足に向けようとはせずに、下降線をたどって物質的な、地位的な満足におもむく。一次的な必要に誇大な強調をおくのである。彼の欲求の尺度は、自由に導くはずの真の尺度のひっくり返しといえる。

次に第二の理由は、文明と文化の混同は人間の尊厳の転視につながるものである。すでに二つの前提についてのべた。(1)社会は自由を達成するために存在する。(2)社会の質と性格はメンバー自身の作りあげたものである。すなわち、メンバーは自分自身のために自身を統御するのである。こう言うてよからう。各人は自分の良しと思うものを最高の価値とする。しかし、それを実現するための最低条件は相互援助であるので、他の人間も自身と同じく、尊ばれ、評価され、助けられて然るべきである。つまり、自分を軽蔑しないと同じように他人も軽蔑することはできない。ところが、今日では立場は理想とは違っている。文明と文化がいっしょくたにされるやいなや、個人は自分の満足のため、他人のことなど考慮せず、いやおうなしにまいしんずる。この

ゆえに、個人は他の人間を自身の目的のための手段（あるいは障害物）としてみることになる。文明と文化の混同のもたらすものは、人間が自分を軽蔑する（自己実現を最高位から引きおろすことによって）ことばかりか、他人を軽蔑する（かれらを利用して目的を遂げようとすることによって）ことである。どうしてこうなるのか？ もしも、人間の目標が単に物質的、肉体的なものの範囲のみであるとすると、他人に内在的な価値を認めてやることなど意味のないことである。そしてまた、他人の願望が自分のと同等の重さを持つことなど、主観的にも、客観的にも意味はない。結果は眼に見えている。——『各人は自身のために『良い社会』（と私たちのみなすもの）においては、同様の標語が有効であるが、その意味するところは、『各人は自身のために、他人とともに、他人のために』である。

言葉を換えていうと、文明と文化の混同はひとの行動の様相、形を変えて緊張を生む方向へと進ませる。それというのも、外面的な

もの（地位、利益、物質的悦楽、肉体的美）にあこがれるからである。そのため、これらのことを実現させたいとする人間の努力は、心的満足（愛情、安心、自己実現の）に導くべき重要な活動の欲求を脇にのけてしまう。結局、意識的には心的満足の重要性に反対するものではないにもかかわらず、実際的には低くみられており、それが上に述べられた問題なのである。（現代文明の数々の肯定的な成果にもかかわらず）付け加えるに、文明の進歩、およびその付随のもろもろという名目のもとに、その文明社会には成員に同質の行動を要求する傾向のみられることに気付く。すでにのべたとおり、文明とは効率、合理性である。これらのためには規格化、画一化、反復作業が要求される。そのため、ある範囲からの逸脱は社会への侮辱とみなされる。個人は既成の枠組の中で生き、今日受け入れられている規則と習慣にもとづいて行動するよう予期されている。ゆえに普通の平均的、画一的な人間が理想なのである。というのも、かれは何よりも社会が目的をとげるのを手伝うからである。かくして、人間は画一主義によつてのみ自己の『真の』利益を得られると思ふかもしれない。もつと悪いことに、他人

労働

一般的に労働には三つのはたらきがあると思われる。(a)生計の源である。(b)社会生活上の経済的、社会的、技術的な進歩に寄与する。(c)個人の創造性の表現である。

私たちの見方からすると、最も生産的な労働とは、あきらかにこれら三つのはたらきすべてを兼ねそなえている。生計の源としては

手に入れることができる。

欲求のピラミッドの底辺を満足させる。社会的な手段としては、集団のメンバーが自己表現の客観的、一般的な条件を整える助けとなる。そして、個人的創造性の面では、労働は才能や可能性をあらわすことを可能にする。その上に、労働が肯定的なはたらきとしてある場合には、必ず労働は心理的、社会的な安定をもたらす。労働の肯定的な要素のゆえに働く者は自分自身を仕事に、仕事の場に、仕事の最終的な目的に、また仕事の仲間同化させるようになるからである。その仕事は建設的であればある程に仕事からくる同化、安定は増すのである。

しかし、労働の重要さは自己表現に寄与することばかりで終るのではない。労働はまた、個人的な、そして社会的な存在としての人間の価値を引きあげる。すでに述べたとおり、生活をコントロールすることが自由を実現する条件のひとつであり、労働はその機会を与えてくれる。ひとが自分の意志で働くとき、かれには才能を開発し、必要をみたし、社会生活、社会関係をコントロールする機会が与えられる。このようにして、働く人は、自己実現の客観的条件と、自由を得つつあるという主観的な（勝るとも劣らぬ重要な）感じを

それでは、キブツのどこが一体そんなに特別なのだろうか？ 今日の数かずの社会で、すでに上にのべたような条件をみたしているのではないか？ 外面的には先進国はそれらの条件をそなえているようにみえる。しかし、それらの社会には、キブツに特有な決定的な要素が欠けている。いわく、すべてのひとの労働と生産への参加である。これこそが私たちのあいだで自由の達成を保証できるものである。現代企業の労働関係を指摘するひとも

あろう。そこには人間に必要なすべてが見い出せるとも言う。——良い生活、雇傭者側の正当な取り扱い、法的権利、年金保証、企業負担による技術訓練、そのうえに、経営への参画すらも。——しかし、これらはひとつとして根本的に人間の満足を増進させるものではない。（今日労働者が享受するすべての利益にもかかわらずかれらの不安定さをみよ。）

これには三つの理由がある。

1・基本的には、雇傭者、被雇傭者の関係というのは、他の資本主義的な枠組みと何ら

違うものではない。一方が頂点に、他方はその下にいる。そして、経済機構はそんな状態が永続することを保証している。

2・一般的には、改善された条件（それら働く人たちが無視したり、小馬鹿にしないと仮定して）のもとにおいても、働く人は雇傭者の彼に対する偽善的な庇護を感じる。

3・最後に、すべての利潤は働くひとびとのものといわれているが、実際は彼らのためではなく、雇傭者の便宜であることを労働者はかきつける。それらの便宜は働く者の購買力、生産力を高め、彼らを働き場所がなじがらめにするように意図されている。その結果、たとえ離れたくとも去ることができなくされている。そのゆえに、働く人が生産過程において言葉通りに共同経営者でない限りは、どんなに便宜を計ったところで、自由に到る方法となることはできない。

以上の考察に加えて、労働の、今度はその心理的な側面について思い起こさなければならぬ。人間の自由にとって社会という枠組が必要なことはすでに述べた。あきらかに人間には関係を結びたいという内的な要請がある。自分のエゴの一部を他人の中に植えつけ

が深められ、広められる。隣人と共にあるという意識は強まり、お互いの信頼感は増し、助け合いの精神がゆきわたり、努力を分け合う気持が強まる。他方において、労働は個人特有の性格の表現のための客観条件を創り、個人的に、また集団的に、社会の構成員の物理的条件を向上させることは前に述べた。そこで、主観的にも、労働は自由を実現する立派な手段であるということがわかる。

相互信頼

個人と社会という区分が人為的なものであるからには、自由への根本的な変化は、どんな社会にあっても、集団的な形でのみおこる。ただし、同時に外面的な変化がともなう場合においてであるが。

この意味するところは、すなわち、自由への客観的条件を打ち立てるためには、人びとの社会生活が集団的に変わらねばならない、ということである。社会の構成員が完全にめざすものを知っている場合にのみこれは可能

であり、自由へと方向づけられた変革を許容できる場合に限る。言うまでもなく、他の仲間も自分に賛成してくれる、（あるいは少なくとも賛成するように説得できる）と思わなかったら、新しい生活はできるものではない。言葉を換えて言ったら、社会の構成員のあいだに相互の信頼がなかったら、自由は達成できないということである。たとえひとに自由のための客観的条件がすべて備っていたとしても、集団の中の他の仲間の利益に関することをよしと認められなかったら、かれもまた自由ではありえなくなる。他人もまた自分の自己実現に関心を持っていると感じられない限り、ひとは自身の自己実現を高次の視野から見なくなるからである。たちまちそのひとは自分の低位の欲求を他人から守らざるをえなくなり、失ってしまうことを恐れるようになる。——生存のための単純な闘争には、自由の入りこむすまはしない。結局、社会の大多数のものが自由をめざし、大多数の者が他の仲間の善意を信じている限りにおいては、私たちは自由であるということができよう。ここでソクラテスの理想を思い出す。——自由は一般的な社会変革を通じてではなく、個人的に、各人の心の中で得られる

べきものである。——ソクラテスは次のように言う。もし、万人がこの内的変革をめざして教育されるならば、もし、万人が完璧な個人となるならば、その結果は当然完璧な社会ができるであろう。自由の達成という精神的

な欲求をひとびとが認めるやいなや、すべての努力は自由という至高の目的にのみ捧げられるであろう。そうすれば、何人といえども自己実現の願望をさへさえることはできず、そのための闘争をはばむことはできない。ソクラテスは強調する。外側から課される形式的な法律はもはや必要でなくなる。自由へのあこがれが人間の行動を律する唯一の法となるからである。個人と個人のあいだの争いはすべて絶えてしまう。すべての人間が自分の自由と、他の人間の自由にかかわまわなくなるからである。そのゆえに、形式的な法律は不要になり、だれでもが、他の人間も同様にするであろうことを信じて、自分を律する。これはソクラテスの夢である。それに付け加えて、集団としての社会は、メンバーのすべての必要を満たせるような客観条件を創り上げねばならない。繰り返すが、ひとがこの作業に取り組むのは、他人もまた同様にし、彼の目的を分け合い、同じ理由のために事業に取

り組んでいると真心から信じているからにほかならない。

その上に、社会関係とは影響のしあい——物的、精神的、文化的、行動的な——のことである。このようにして、人間は常に、反応することを迫る選択、影響力、関係などの複雑な網の目の中に立っている。社会の一部であるからには反応しないわけにいかない。

それがどんな意味を持っているのか？ 人間関係は自分を定義すること、自分を理解することと言ってよからう。ひとは絶えず生きていることの条件を分析検討せねばならず、いくつかの行動のしかたから選ばなければならず、欲求を感じなければならず、他人との関係における精神的、社会的な検討をしなければならぬ。このことの重要性は、これが自由に至るための条件のひとつだからである。自己分析の必要を感じないとすると、ひとは自分が何をめざし、いかにそれを果たすかを知ることができないであろう。

集団としての社会においては、生活が相互理解、開放的かつ誠実な討論、個人の生活の

容しやない検討に裏打ちされていなければならない。自由は近づいている。誰もが、このゆえに、他人の自由の尊重という共通の考え方にのっとって、自分自身ばかりでなく他人をも理解しなくてはならない。これが相互信頼である。

要約すると、協力と同感がひとびとのあいだになかったら、自由は達成できるものではない。協力、同感の二つの性質の基本は相互の信頼である。かくして、相互信頼は私たちが自由に達するのを助けるためのひとつの手段価値である。

——つづく——

ハリー・シェンケルはキプツ・ツオラのメンバーである。